



# 清末における女子の日本留学と日中間の知識遷移の研究 : 留日女子新聞・雑誌を中心として [全文の要約]

著者	張 淑?
発行年	2019-09-20
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第755号
URL	<a href="http://doi.org/10.32286/00019174">http://doi.org/10.32286/00019174</a>

## 清末における女子の日本留学と日中間の知識遷移の研究 —留日女子新聞・雑誌を中心として

関西大学大学院  
東アジア文化研究科・文化交渉学専攻  
張 淑婷

### 要 旨

近代以来、中国人は積極的に西洋を学んだ。特に日清戦争後、日本を通じて西学を吸収した。これは「路近、文同、時短、費省」という考えからきたものであり、当時の中国人は盛んに提唱した。同時にこの時期になってようやく、中国の女性は初めて留学生として海外で近代的な教育を受けることができた。日本に留学した女性たちは、中国では何千年の封建の礼教に束縛されており、自国では触れることができなかった先進的な教育と接触し、「天赋人權」など民主自由の思潮の影響を受け、自分自身が中国の女子教育を発展するための担い手、また救国する女子国民としての意識が次第に芽生えたのである。このような考え方の元、国家の危機に瀕している時、女子は男子とともに、革命運動へ参加し、雑誌と新聞の出版と、女子組織の成立などの活動を通じて積極的に活躍しており、「女権を争い、女学を栄え」というスローガンを叫んで歴史の舞台に立ったのである。この時期に西洋と日本の色彩に染まった女子教育思想は様々な媒体を通じて中国に伝えられ、中国の社会に非常に大きな影響を与えた。

近年、中国近代女子教育、辛亥革命期中国女性参政権運動、中国女性新聞史と女性観の変化などに関する研究は徐々に注目を集めている。しかし、清末留日女子新聞・雑誌に関する多くの研究では『中国新女界雑誌』、『天義報』及び『留日女学会雑誌』のみを検討しており、清末における日本留学女子学生の出版活動の嚆矢である『江蘇』の「女学論文・文叢」及び秋瑾の『白話』についての分析はまだ不十分である。また、新聞・雑誌は散逸したものも多く、完全に収集することはできないため、研究の一貫性がかけたものも多い。このように誤った情報が参考資料として流布して事実がねじ曲げられているのである。さらに、一部の研究はそれらの女子新聞・雑誌の記事内容に立ち入って検討しているが、留学先である日本からの影響関係、すなわち中国国内の教員不足を改善するために、派遣された日本留学の中で、女子留学生がどのように日本で接触した日本の知識を生かして新聞・雑誌によって中国に伝えたのか、という視点から検討するものはほとんど見られないのが現状である。

そこで、本論は清末における中国留日女子紙誌（新聞・雑誌）<sup>1</sup>を対象とし、新聞・雑誌の刊出された背景と内容に着目して分析を行った。中国女子留学生達がどのように日本で接触した知識を認識したのか、その影響でどのような理想的な女性像を求めたのかを分析し、近代女子教育や女性解放思想を彼女たちが如何にして中国に伝達したかを論ずることで、中国女子の役割だけでなく、西学東漸の「ヨーロッパ発、日本経由、中国行き」という道筋における日本が果たした役割をも明らかにすることを目的とする。以下に、各章の要点を整理して示す。

---

1 研究対象は、留日女子学生が編集し、創刊した新聞・雑誌、および清末まで日本で創刊して女性向けの紙誌から、『江蘇』「女学論文・文叢」、『白話』、『中国新女界雑誌』、『天義報』、『留日女学会雑誌』という五つのものを限定する。

序章 研究背景、先行研究、問題提起、研究目的と研究方法を陳述した。

## 第一章 清末における女子の日本留学

中国人女子が日本へ留学する前の生活状況や、日中両国における女性生活、女子教育の発展などの背景を分析した。中国では19世紀半ば、西洋文化の中国への伝播とともに、「不纏足」運動、女学堂など新たな風潮が中国の女性生活において現れた。宣教師の教会女学堂に刺激され、「教育救国論」という思潮の下で中国全国に女学堂の展開が盛んになっており、女性教員の不足という問題も次第に現れた。一方、日本学習ブーム、女学生の自発的意識や開明的官僚・知識人の推し進めで、また日本方面が積極的に清国教育を扶助すること、日本の国家主義思想の下、国家利益に奉仕する良妻賢母を旨とする女子教育が中国人に受け入れられるなどの原因で、中国女子の日本留学が始まった。次に、清末の女子留学の実態を分析した。中国人女子留学生受け入れの中心校であった実践女学校は実学を重視し、良妻賢母の女性教育主義を謳った校風であった。清国国内において女性教師の育成が急務であったことから、速成師範の教育を巡って教育活動が展開されたのである。最後に、女子留学生の在日中における結社活動と出版活動を巡って検討した。彼女達の活動はほとんど中国の留日男性との協力の下に推し進められ、多くの女性新聞・雑誌はそれぞれ女性団体の機関誌として作られた。そしてそれらの新聞・雑誌は活動資金の不足、さらに清政府による廃刊圧力といった理由から、あまり長く活動が続けられなかったことが明らかになった。

## 第二章 早期の女子留学生と『江蘇』「女学論文・文叢」

1905年にまで最初に日本へ留学しに来た十数人の中国女子留学生達は、日本において初めて海外の女性団体「日本留学女学生共愛会」を創設した。しかし機関紙の刊行は異国での慣れない環境、学識の不足、経済的に独立してないなどの諸要素の影響で、単独で行うことは非常に困難であった。そのような状況の中で、彼女たちは留日男性雑誌である『江蘇』に「女学論文・文叢」というコラムを設け、中国女性の権利、女性教育の振興などの女学問題を討論する12篇の文章を発表した。その内容を分析すると、早期女子留学生が主に中国の女子教育の振興及び、女権の獲得という二つの方面に関心を寄せたことがわかった。また、早期女子留学生が追求したい理想的女性像は当時梁啓超を代表として提唱した「国民の母」ではなく、「女子国民」という概念に注目したのである。彼女達が追求した理想的な女性像は、単に家庭の従属として男子国民、次世代の国民を補助し、育成する良妻賢母の女子ということだけではなく、国家のために自らをささげる女性なのである。このような特徴は、多くの投稿で「西欧女傑」を例として挙げていることからそれは明らかである。早期の女子留学生は、学識、独立精神を備え、男性と同じく国民として共に革命に身を投げ、救国に尽力する西洋女子国民を追求していたのである。

## 第三章 秋瑾と『白話』

服部繁子と坂寄美都子の回憶を取り上げ、今までの先行研究と異なる秋瑾の渡日経緯と、秋瑾が実践女学校へ2回の入校があったことを明らかにした。秋瑾は渡日するまでは、家庭における女性問題などに関心を持たなかった。しかし日本に来てまもなく、民智の開化と「普遍語」の普及のため、「演説練習会」の設立、『白話』の創刊、「実行共愛会」の創立に尽力した。彼女が立ち上げた『白話』では、秋瑾の投稿から女子問題、女子の振興により国家を救うことができるとした点が見られる。このような留学前後における、秋瑾の主張の転換はおそらく、留学中に秋瑾が様々な考え方に触れたこと、また実践女学校で国家主義から影響を受けた女子教育を受けたからだと考えられる。さらに、秋瑾は、明白に反満、革命などを提言しなかったのは最初に服部と日本へ留学をするための条件として、「日本での過激な言行を控える」という約束を念頭に置いていたからだと考えられる。秋瑾が帰国後に上海で刊行した『中国女報』では、女性問題について、留日中の『白話』にみられた主張よりも科学的方法論を述べた。そのような理由として日本で滞在中の経験は当時、秋瑾が日本の女子

教育への理解を深め、その中で女性が一定の素養を備えて国家の利益のために尽力し、その奉仕する方法について彼女の認識は以前よりまとまっていたらと思う。秋瑾は女子問題への主張は、やはり当時日本の国家主義下の女子教育思想と一致しているが、最も異なるのは、秋瑾は女性が奉仕すべき対象は満族が統治している清国ではなく、漢族によって作られる政権だと思われる。

#### 第四章 燕斌と『中国新女界雑誌』

『中国新女界雑誌』の文章に踏み込み、筆者が発見した第6期の文章をも用いて、多くの先行研究とは相違する二つの点を明らかにした。一つ目は、同誌第4・5・6期の正しい出版時間は1907年7・10・12（より遅れる可能性もある）月のはずであるということ、二つ目は、同誌の廃刊理由は、従来の説であった第6期に反動の過激な言論を載せたからではなく、経営不良、資金不足によることであったことが明らかになった。同誌では同時期に刊行された女子新聞・雑誌の中で、発行数が最も多いものであり、それは同誌が政治的論述より、女性教育に関わる「実学」の内容を多く取り入れ、多くの読者に好まれたからのである。編集長燕斌は、創刊主旨を「女子国民」という四文字にまとめ、それを実現するために、編集者が日本で留学した際に接触した女子教育思想を用い、同誌に日本女性学校制度を紹介したことだけにとどまらず、当時日本女子学校の教科書における「家政」、「教育界」、「女芸界」、「通俗科学」、「衛生顧問」など実学の知識も積極的に同誌に引用して載せた。このように当時の中国女性に様々な知見を提供し、女性独立を啓蒙させることを導いた。また、それら女性編集者は日本経由の西洋女性教育内容を重訳した際に、底本における日本に関連する部分を削除して西洋に関する部分だけを選出して訳すのは、西洋の女子教育を日本の国情に合わせて再構成した日本の女子教育・教育論より、西洋女性に関する情報・見識に関心を寄せ、西洋女性教育により憧れていたと思われる。さらに、日本人が書いた欧米女傑伝記を中国語に翻訳し、中国人の女性には独立の意志、智慧があり、国家に貢献できるとする女性観を樹立させることに一役買ったのである。

#### 第五章 何震と『天義報』

『天義報』は最初に「女子復権会」の機関紙として作られたが、実際に主導権を握っていたのは、何震と劉師培の夫婦であったことが明らかになった。『天義報』は「女子国民」の育成という本質からのズレが生じ、唯一無政府主義的性質を持つ女子雑誌であることがわかる。何震は、男性の打倒、国家制度の廃除という方法を用いることによって、女権を獲得することができるかと主張し、無政府主義女性の女性像を追求したのである。更に『天義報』に載せられた多くの無政府主義に関する大量の投稿は日本人が執筆したものに基いて中国語に翻訳されたものだということが明らかになった。また、日本人社会党世論の陣地である『大阪平民新聞』は日本の社会党機関誌として、『天義報』に対して世界の社会党、無政府党などの革命動態を紹介した最も重要な根拠となり、劉師培らが日本社会党人を模倣し、自ら「社会主義講習会」を組織した。同会の講習会例会では「日本社会主義金曜講演会」の成員、或いは日本社会党「強硬派」の成員を招待し、公開して講演する形式で当時留日の中国人に無政府主義を宣伝した。『天義報』の編集者はアナキズムを受け入れる際に、自国の国情を踏まえてアナキズムを中国的に解釈したことが分かった。女子解放と無政府主義の両方を宣伝する「天義派」は、ヨーロッパ、日本のアナキズムに対して、自分の見解を「平等的無政府主義」と称した。さらに中国人がアナキズムをより容易に受け入れられるように、「天義派」同人はアナキズムを中国古典と融合して中国伝統学説、古代政治という知見から無政府主義の合理性を説いたのである。

#### 第六章 唐群英と『留日女学会雑誌』

まず唐群英の生涯、渡日経歴、そして彼女が1911年に「留日女学会」を設立し、その機関

誌である『留日女学会雑誌』を1911年五月に創刊したことを述べた。辛亥革命が起き、唐群英がそれに呼応して帰国したため、『留日女学会雑誌』は創刊号のみ出版された。現在まで原本を基に検証したものがないため、創刊号の内容に関する分析を行った。そして、その結果、『留日女学会雑誌』は『中国新女界雑誌』の様式を受け継ぎ、内容も、女子教育における家庭教育・実学教育、婚姻・人権の自由、欧米女傑伝記の翻訳などという一致する箇所がみられるが、同誌は独自の特徴があることが明らかになった。まず、女性参政権に注目することである。1912年に唐群英が主導した「女性参政権運動」は中国全国を席卷していたが、その兆しは『留日女学会雑誌』第1期で既に見つけることができる。同誌が唱えたのは「実業」、あるいは女子に相応しい職業を發展させ、女性の独立精神を育成するという点に注目することである。さらに、同誌では「良妻賢母」と「女子国民」の主張が混雑しており、それぞれ女性像の多様性が現れたと結論した。

## まとめ

本論文によって明らかとなったものを端的にまとめるならば、以下のものになるろう。

### 1. 女子の日本留学と知識遷移

辛亥革命によって新旧が交替する清末の十年間に、中国女子は初めて留学生として女性教員となるための女子速成教育を習得しに渡日し、彼女は先進的生産力をもった産業、政治、文明などと接触した。本研究の対象となる五つの新聞・雑誌・コラムを基に、それら清末女子留日学生が次の3つの方面から日本で吸収した知識を中国に伝えたことが明らかとなった。

- ① 日本女子教育思想の伝播（国家主義下の良妻賢母）
- ② 日本女子学校教科書の翻訳、抄訳
- ③ 和書漢訳（西洋婦人伝記、無政府主義理論）

このように、日本での留学期間に、中国国内の女子師範教育を推進する教習になる使命を負う女性留日学生は、当時日本の国家に奉仕する良妻賢母教育を受け、この過程に、家庭における子育て、家事に必要な家政、衛生、および家計の補助になれる手芸技術といった実学的な内容を吸収した。

更に、民族危機の解決には、中国女性の智識を開化し、国家のために家庭において役に立つ人（良妻、賢母）になることを鼓舞するために、留日女性編集者たちの多くは日本で身につけた知識を新聞・雑誌に載せ、近代女子学校教育の制度、女性観を伝えた。例えば、『中国新女界雑誌』の「家政学講義」、「造花術」の投稿、『留日女学会雑誌』の「心理」「植物」の投稿である。

それだけではなく、それらの学業を修めて帰国した女学生は、積極的に中国女子教育に携わっていた。例えば、秋瑾が『中国女報』で在日中に『日本赤十字社篤志看護婦人会教程』を漢訳した「看護学教程」を発表したこと、成女学校の卒業生孫清如は『女子師範講義』を編纂し、清政府に受け入れられたこと、中国新女界雑誌社出版、叢瑀珠譯編『新編家事教科書』は民国の女子師範教本になったことである。さらに、彼女も帰国後に積極的に女子学校の教習を務め、女学校を設立した。例えば、秋瑾の「明道女学」唐群英の「湖南女子法政専門學校」、「希陶女校」、「復陶女子中學」、張竹君「中西醫學院」などである。

### 2. 「ヨーロッパ発、日本経由、中国行き」という西学東漸の道筋における日本の役割

この五つ新聞・雑誌ではそれら日本の女子教育・女性観および日本を経由した西洋女子教育、民主自由の思潮などの知識をそのまま受け入れたわけではなかった。当時、中国における反満革命運動の勃発、革命党人が留日学生群体を鼓舞する、清政府の圧迫及び留学政策の変化などの影響で、一部の留日女子学生は、中国と日本の国情の違い、また、日本における女子を国家・家庭の付属として教育する「良妻賢母」女子教育の本質を認識した。彼女たちは、中国における深刻な民族危機を解決するには、女子が国民として男性を頼らず自ら立ち

上らなければならないと覚醒し、「女子国民」として立身すると主張したのである。例えば、彼女たちはそれら日本を經由した西洋女子教育内容、女傑伝記を優先し翻訳し、西洋女子国民を最終的に理想的女性像として追求した。「女子国民」を立身する規範として自我要求していた留日女子学生は、留日男子学生とともに、救国運動に投身した。この中に、秋瑾、唐群英、何香凝、林宗素、胡彬夏、張漢英、劉青霞、方君瑛、林演存らなど中国女性解放運動、女性参政運動に重要な影響を与え、名をはせる女傑が数多く現れていた。

このように、編集者達は中国の国情に応じて自ら女子国民への訴え、女性参政、無政府主義の理解をすべきことを主張し、これら知識の生成、伝播、接触および受容という過程は、まさに「ヨーロッパ発、日本経由、中国行き」という西学東漸の道筋を示したものだと言える。

したがって、清末における女子の日本留学の十数年間に、日本は中国革命の舞台裏であっただけではなく、中国女子教育の発足、女性覚醒、女性運動の舞台裏となったと言っても過言ではない。

### 3. 今後の課題

上記の内容について明らかにすることは出来たが、以下のものについて課題が残った。

一つ目は、本研究では五つの新聞・雑誌の主な編集者、新聞・雑誌の内容を大まかな整理を踏まえて以上の結論をまとめたが、これら留日女子新聞・雑誌における日本女子教育・女性観から受けた影響を検討する際に、同時期の日本女子新聞・雑誌を参照しておらず、より多く日本方面の資料を検討すべきと思われる。

二つ目は、同時代における日本で発行された女性新聞・雑誌を中国国内女性新聞・雑誌との繋がりには考察することができなかった。

三つ目は、これら新聞・雑誌でよく現れた「良妻賢母」、「無政府主義」などの言葉が、日中間の受容に関する考察はまだ行っていない。これらは今後の課題として進めていきたいと思う。

本研究ではこれまでの研究で触れられなかった『中国新女界雑誌』第6期原本、『大阪平民新聞』と『天義報』の関係の検討、『留日女学会雑誌』原文についての分析を行ったこと、研究対象とする五つ新聞・雑誌、編集者に関するいくつかの点について先行研究の誤りを指摘することができたこと、さらに西学東漸における日本の役割の視角から留日女子新聞・雑誌を検討するのは本研究の独創的知見だと思われる。本論の結論に基づき、中国の女子留学史、女子新聞・雑誌史の研究がさらに発展し、日中両国の友好関係が一層推進していくことを願う。